調査報告
左雲萌夏/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 15(2023)10-18

初級学習者のオノマトペ使用の特徴から見る オノマトペ指導の必要性と方向性の示唆
―「心」に関する表現に着目して―

左雲萌夏

要旨
本研究は、日本語学習者のオノマトペの使用実態を明らかにすることを目的とする。さらに、伊藤他（2022）で選定した「日常語彙オノマトペ 100」に基づき誤用も見る。研究方法として多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）の対話データを使用し、学習者が使用しているオノマトペを抽出した。その結果、上級に上がるにつれオノマトペの使用は増えるが、母語話者と比較すると、上級学習者でも一人当たりの使用回数は半分程度しかないことがわかった。また、初級の学習者の誤用の特徴として、出来事と関係するオノマトペの使用に関して、その出来事に基づく使用ができていないことや、使用しない形を後続させてしまうことが挙げられた。このことから、初級からオノマトペの使用場面やコロケーションの指導を行うべきであると考えられる。

キーワード
オノマトペ、日本語学習者、日常語彙、初級、誤用

1. はじめに
日本語のオノマトペの多さは他の言語と比較しても顕著であり、英語は約 3000 語であるのに対し、日本語は約 12000 語もあるとされている（灰島 2005）。しかし、オノマトペは会話の中で使用されることがほとんどであり、ローレンス（1993）は学術論文には全くと言っていいほど用いられず、改まった話し言葉においても、くだけた会話に比べると使用が少ないと述べている。そのため、日本語学習者にオノマトペを導入する際は、会話での使用を意識して行う必要がある。

一般的にはオノマトペとは擬音語・擬態語の総称である。本研究では小野（2007、pp.11-12）で挙げられている以下の 3 つの基準を採用する。

① 人間の発声器官以外から出た音を表した言葉
② 人間の発声器官から出した音声で、ひとつひとつの音に分解できない音を表した言葉
③ 音のないもの、聞こえないものに対して、その状況をある音そのものが持つ感覚で表現した言葉

なお、本研究で扱うオノマトペは小野（2007）『擬音語・擬態語 4500　日本語オノマトペ事典』に載っているものとする。

2. 先行研究

ここでは、日本語学習者のオノマトペに対する認識や、日本語教育でのオノマトペの扱いについてまとめる。

窪薗（2017）は、日本語学習経験のないオランダ語母語話者や英語母語話者に対して、あるオノマトペを提示し、その意味を選ばせたり、どのような意味かを意味項目（「大きい音ー小さい音」、「鋭い痛みー鈍い痛み」など）について 7 項目で判断させたりする実験を行った。すると、日本語母語話者と同じように判断できていたと述べている。しかし、このように判断できるのは日本語を学習したことがない外国人に限られる可能性があるとしている。いくつかの先行研究から、日本語の学習経験のある人は日本語の知識に引っ張られてしまい、正しく解答することができないと考えられると判断している。

また、張（2018）は中国語母語の学習者のオノマトペ使用特性を探るため、オノマトペの使用量、使用するオノマトペの多様性、使用する具体的なオノマトペ、オノマトペ使用における誤用の 4 点を調査し、日本語母語話者、韓国語母語学習者、英語母語学習者と比較した。その結果、中国語母語話者はほかの母語の学習者よりは使用頻度が高いものの、日本語母語話者ほどは使用していなかった。さらに、誤用も多く、使用してはいても正しく使えているとは言えないことがわかった。

また、秋元（2007）でも、語彙教育においてオノマトペは、和語、漢語、外来語、混種語や数詞、助数詞と並ぶ重要な項目として位置づけられていると述べている。しかし、オノマトペは中・上級で取り上げられることが多く、初級ではほとんど扱われておらず、中・上級であっても、カリキュラムの中で項目として扱われているわけではないと述べている。加えて、蘇（2021）でも中国の日本語教育では、オノマトペが初級日本語の教科書における学習項目に占める比例が極めて低いというのが現状であると述べている。蘇（2021）は中国のみを対象にしているため、他国の現状を確認することはできないが、蘇（2021）が例として挙げている教科書は『みんなの日本語　初級』であり、これは全世界で広く使われている教科書であるため、中国以外の国でもオノマトペが教科書で扱われていることは少ないと推測できる。

このように、語彙教育ではオノマトペ学習の重要性は認めているものの、現在の教育現場では扱われることが少ない。また、日本語を学習したことのある外国人が正しくオノマトペのイメージをつかむことができないのであれば、オノマトペの習得は難しい。実際に張（2018）では誤用も多いと述べている。そのため、学習者が使用しているオノマトペの使用実態を明らかにすることで習得の手助けになると考えられる。

最後に、本調査で使用する「日常語彙オノマトペ 100」の選定方法について伊藤他（2022）を概観する。調査対象として、3 つの先行研究（三上 2007、国立国語研究所 1984、獅々見 2016）と 1 つの言語資料（アニメ『サザエさん』）を使用し、それらの中で 2 つ以上に使用されている語彙を抽出した。その結果以下の表 1 の語彙が得られた。

また、伊藤他（2022）では「日常語彙オノマトペ 100」の特徴を探るために『分類語彙表』を使用し、オノマトペの分類を行った。その結果、『分類語彙表』の中項目では「心」に関するオノマトペが最も多かったと述べている。表 1 の下線を引いた語彙が「心」に関するオノマトペである。これは複雑な心境をオノマトペによって表現することで、自分の伝えたい気持ちを的確に表現できることから、学習者も習得するべき項目だと考えられるとしている。このことから、学習者の誤用を見るにあたって、「心」に関する

オノマトペを分析対象とする。

表 1　日常語彙オノマトペ 100

あっさり	いらいら	うかうか	うっかり	うとうと	うろうろ
がたがた	がっかり	がやがや	がんがん	きちんと	ぎっしり
きっぱり	きゃーきゃー	ぎゅうぎゅう	きゅっと	きょろきょろ	きらきら
ぎりぎり	ぐずぐず	くたくた	ぐっすり	くらくら	くるくる
ぐるぐる	げらげら	こそこそ	こっそり	ごろごろ	さっさと
さっと	ざっと	さっぱり	じーっと	しっかり	じっくり
じっと	じろじろ	ずーっと	すっかり	すっきり	すっと
ずっと	すらすら	ずらり	せっせと	そっくり	そっと
そろそろ	ぞろぞろ	そわそわ	たっぷり	ちゃんと	ちょいと
ちょくちょく	ちょびっと	でこぼこ	てっきり	どきどき	どっと
どんどん	にこにこ	のろのろ	のんびり	ばしばし	ばたばた
はっきり	ばったり	ばっちり	はっと	ぱっと	ぱぱっと
ははは	はらはら	ばらばら	ぴかぴか	ぴっかぴか	びっくり
ぴったり	ひょっと	ぴんぴん	ぷかぷか	ぶつぶつ	ふと
ふらふら	ぶらぶら	ぶるぶる	ふわふわ	ぺこぺこ	べらべら
ぺらぺら	ぼーっと	ほっと	ぼんやり	まごまご	めちゃくちゃ
もりもり	ゆっくり	ゆったり	わくわく		

3.　調査方法

3.1　調査目的

本研究の目的は、現在の日本語学習者のオノマトペの使用実態を明らかにすることである。さらに、伊藤他（2022）で選定した「日常語彙オノマトペ 100」に基づき「心」に関するオノマトペの誤用も見ることで、学習者の使用語彙の特徴も探る。

3.2　調査方法

まず、初級・中級・上級に分け、レベルによる使用を見る。学習者のレベルの判定には J-CAT の合計点を使用する。その理由としては、日本語能力試験とのスコア互換、CEFR とのスコア互換を示しているからである。ここではレベルごとの使用を概観するために、初級（0-199 点）・中級（200-299 点）・上級（300 点以上）の 3 段階に分け、一人当たりの使用回数を調査する。

その後、誤用も確認し、さらに初級学習者の間違えやすい語の特徴を明らかにする。誤用を見るにあたり、「日常語彙オノマトペ 100」の中で「心」に該当するオノマトペに絞って分析を行う。上述したように、伊藤他（2022）では「心」に関するオノマトペを学習すべきだと述べている。また、「心」に関するオノマトペは学習者自身のことを表現する際に使用できるオノマトペである。学習者自身のことを表現する語彙を学ぶ理由として、川口（2016）の「個人化」の考えを援用する。「個人化」とは、「特定の文法・語彙項

目を使って表現練習をするときに、必ず学習者個々人の経験・感情・思想が表現されるように支援すること」である。川口（2016）は「個人化」が必要である理由として、人間はものを学習するとき、とにかく自分を通して学ばないと身につかないからであると述べている。特定の文法・語彙項目は「自分にとってこういう意味がある」、すなわち「自分にとってこの文法や単語を使うことで自分のここが表現できる=自分についてこういうことが言えるようになる」ということが保証されるのであれば人は進んで外国語を勉強すると述べている。以上の理由により、「日常語彙オノマトペ 100」の中で「心」に該当するオノマトペの誤用を見ることで、初級学習者へオノマトペを導入する際の足掛かりとする。

3.3　調査対象

多言語母語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language　以下、I-JAS）の対話データを使用し、学習者が使用しているオノマトペを抽出する。今回の調査方法として、コーパスを使用する方法と、穴埋めテストを使用する方法が考えられたが、コーパスを採用した。その理由としては、今回の調査では学習者が既に習得している語彙の中で、自然に使用されたものを調査対象にしているからである。学習者のオノマトペの使用に関して、使用頻度の低さについて言及されている研究もある。張（2018）では中国語母語話者は、日本語母語話者より使用するオノマトペの数が有意に少ないことが明らかになったと述べている。そこで、本研究でも使用頻度の調査を行うために、コーパスを採用した。穴埋めテストの場合は、あらかじめ想定されている語彙が学習者の使用語彙であるか調査するものになってしまうため、今回の目的にはふさわしくないと判断した。I-JAS の対話データは、30 分程度の会話を行うタスクであり、全体で 7 種のトピックがあり、質問数は 15 である。一問一答にならないよう、自然な会話の流れになるよう重視されているため、質問が前後することはあったが、基本的に 30 分前後で終了するよう調整して、調査が行われている。このデータを選んだ理由として、様々な母語の学習者のデータがあること、オノマトペが使用されやすい話し言葉のデータがあること、ストーリーテリングやロールプレイとは異なり、比較的自由に発話されている対話データがあることなどが挙げられる。

4.　結果と考察

4.1　学習者のレベル別の使用状況

結果は、全学習者（950 名）のオノマトペの使用回数は 2056 回であった。なお、ここでは使用を見ているため、誤用も含んでいる。その 2056 回をレベルごとに分けたものが以下の表 2 である。表 2 の一人あたりの使用回数を見ると、初級での使用回数は少なく、中級になると使用が増え、上級ではさらに使用が多くなっており、中級の倍以上の使用があることがわかる。つまり、オノマトペは初級段階ではあまり使用されず、学習者のレベルが上がるにつれてその使用が増えると言える。カリキュラムや教科書内で扱われることが少ないと言われているオノマトペでも、他の学習項目と同様に、上級になるにつれて習得が進んでいることが確認できた。しかし、母語話者と比較すると、上級学習者であってもその使用回数は少なく、母語話者の半分程度しかない。さらに特筆したいのは、母語話者は全員が少なくとも 2 回以上オノマトペを使用しているのに対し、学習者はどのレベル

においても、1 回も使用しない学習者がいた。このことから、母語話者は会話の中でオノマトペを使用して会話することが自然であり、学習者もオノマトペを使用することで、より自然な日本語になると言えるだろう。

表 2　レベル別オノマトペの使用回数の比較

レベル	使用回数（回）	人数（人）	一人あたりの使用回数（回）	標準偏差
初級	446	467	0.95	1.82
中級	1329	439	3.02	3.72
上級	281	44	6.38	4.35
母語話者	578	50	11.56	5.10
計	2634	1000		

4.2　学習者のレベル別の誤用

「日常語彙オノマトペ 100」のうち「心」に関するオノマトペは 45 語あり、このうち初級学習者が使用していた語彙は 11 語であった。初級ではこの 11 語を分析対象とする。

表 3　初級学習者の各語における誤用率

語	がっかり	ごろごろ	しっかり	ちゃんと	どきどき	にこにこ	のんびり	はっきり	ゆっくり	ゆったり	わくわく	計
使用数	6	2	5	25	8	6	9	9	13	1	1	85
誤用数	3	1	0	2	0	0	1	6	0	0	0	13
誤用率（%）	50	50	0	8.0	0	0	11.1	66.7	0	0	0	15.3

全体の誤用率は 15.3%であり、筆者の予想より低い誤用率となった。つまり、自ら産出できるレベルの語彙は正しく使える割合が高いと言える。しかし、各語で見ると、誤用が 50%を超えるものも複数あった。その語彙は「がっかり」「ごろごろ」「はっきり」である。しかし、「ごろごろ」の総使用数は 2 語と絶対数が少ないため、1 つ誤用があるだけで、誤用率が 50%を超えてしまう。そこで、「がっかり」と「はっきり」に着目し、その原因を探る。

次に、中級学習者の誤用を見ていく。「日常語彙オノマトペ 100」の「心」に関するオノマトペのうち、中級学習者が使用していたオノマトペは 23 語であり、初級と比較すると倍以上になった。使用回数は増えたが、全体の誤用率は 8.1%と、初級に比べ、誤用率は低くなった。初級で誤用率が高かった「がっかり」「ごろごろ」「はっきり」の誤用率も低くなっている。つまり、初級の段階で間違えやすかった語彙もレベルが上がるにつれ習得が進み、誤用の傾向も変わると推測できる。

表 4　中級学習者の各語における誤用率

語	がっかり	ぐずぐず	ごろごろ	しっかり	じっくり	じっと	じーっと	すっきり	そっと	ちゃんと	どきどき	にこにこ
使用数	7	1	9	11	2	3	1	2	1	137	6	5
誤用数	1	1	1	2	0	0	0	0	1	7	0	2
誤用率（%）	14.3	100	11.1	18.2	0	0	0	0	100	5.1	0	40.0
語	のんびり	はっきり	はっと	ふらふら	ぺこぺこ	ほっと	ぼーっと	ぼんやり	ゆっくり	ゆったり	わくわく	計
使用数	45	45	1	1	1	3	3	2	54	1	4	345
誤用数	2	4	1	1	0	0	0	2	1	0	2	28
誤用率（%）	4.4	8.9	100	100	0	0	0	100	1.9	0	50	8.1

最後に、「日常語彙オノマトペ 100」の「心」に関するオノマトペのうち、上級学習者が使用していたオノマトペは 12 語であり、中級と比較すると減少したが、そもそも学習者数が 5 分の 1 程度しかいないため、上級学習者の使用する語彙の種類が減ったとは言えない。誤用は「がっかり」の 1 語のみであったため、分析することは難しいが、「がっかり」の誤用は初級から上級まで全てのレベルであったため、「がっかり」の習得は難しいと言える可能性がある。しかし、数が少ないため、「がっかり」の習得が難しいと明言するには根拠に欠けるだろう。

表 5　上級学習者の各語における誤用率

語	がっかり	ごろごろ	しっかり	ちゃんと	どきどき	にこにこ	はっきり	ほっと	ぼーっと	ゆっくり	ゆったり	わくわく	計
使用数	2	2	2	29	1	1	2	1	3	9	1	1	54
誤用数	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
誤用率（%）	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.8

4.3　初級学習者の誤用

ここでは、初級で誤用が多かった「がっかり」と「はっきり」に着目し、その原因を探る。まず、「がっかり」の誤用として出た会話例が以下の（1）（2）（3）である。J がインタビュアーである日本語母語話者であり、FFR19 はあらかじめ I-JAS が振り分けた調査協力者の日本語学習者の ID である。

(1) FFR19　J-CAT 合計：168

FFR19：ほんとに、あーん、あ、札幌にいる時、本当に、ちょっと、日本語、頑張りました。だから、ペラペラじゃなかったですが、ほんとに、もっとー、私のー、日本語はもっと、あー良かったです。

J：あ今よりも？

FFR19：そうだと思います。でも、このフランスに帰ってから、日本語で話す機会があまりここになくて。

J：そっか。

FFR19：あー、レベルはちょっとー、あー、減ります？え、ふ、増えます？減ります？

J：{笑} わかります {笑}

FFR19：うんだから、ちょっとー、気持ちは日本語についてちょっと私の気持ちはちょっとえー、**がっかり、がっかり**です。

(2) HHG23　J-CAT 合計：160

J：今までの中、生きてきた中で、怖かった思い出ってありますか？

HHG23：あー、はい。これは、あの二年、二週間の前は卒業の試験ですが、私はあの毎日、んー、とてもあの、くよくよしました。心配しました。そしてあの**がっかり**しました。

J：うん。

HHG23：あの、いつも準備しました。あの、できないと思いました。

J：うんうん。

HHG23：そして試験の受け取るときは、あーのー、ちょっと心配しましたが、幸せことに、合格しました。

(3) SES11　J-CAT 合計：148

J：20 年後、都会と田舎どちらに住みたいですか？

SES11：うーん、たぶん都会です。

J：どうしてですか？

SES11：えー、賑やかで、たくさんのー、店があります。たくさんのことを、できます。

J：でも、田舎のほうが、空気はきれいだし、車はーねいっぱいで混んでませんよ？

SES11：えー、はい。でもーとてもーしずか、私にとって、えー、私は、緊張します。

J：あ、静かだと緊張しますか？

SES11：いえ、都会。

J：あこっち？はいそれで？だったら田舎のほうがいいですね。

SES11：でも私は、えー、いつもー何でもー、しています。えーそれで、田舎に住んでいたら、えー、私にとって、特徴、特徴？

J：うん、特徴？

SES11：えー、**がっかり**します。

「がっかり」は何か出来事に対して、悲しいや落ち込むといった感情を表現するオノマトペである。しかし、上記の例（1）（2）（3）は全て何かの出来事があったわけではない。例（1）（3）は「日本語についての気持ち」「田舎」という事柄に対して、マイナスな感情を表現している。また、例（2）は試験の結果がまだ出ていない状態であるため、「がっかり」という表現は使用できない。試験に落ちてしまった結果、「がっかりした」と言うことは可能であるが、この話者は試験に合格したと話しているため、その意味ではない。このように、なにかの出来事の結果生じる感情表現は誤用が生じやすいと考えられる。

次に「はっきり」の誤用として出た会話例は 6 つあるが、そのうち 2 つを紹介する。

（4）TTH16　J-CAT 合計：198

J：えっとーTH さんは、えっと今大学生ですよね？日本語を勉強してるんですよね？卒業したら、どんなことがしたいですか？

TTH16：あの卒業したら？日本語、あのー**はっきり**ではありません。でも、日本語をつかう仕事をしたいです。

（5）VVN32　J-CAT 合計：153

J：日本語はー、いつから勉強していますか？

VVN32：わたしは、大学に入ったから、日本語を勉強しました。

J：あーそうですか。どうして日本語を勉強しようと思ったんですか？

VVN32：えとー**はっきり**理由は、あの実はありません。

会話例を見ると、「はっきり」の誤用のほとんどがコロケーションの誤用であることがわかった。そして、(4)（5）は後続する動詞として「する」を使用すべきである。つまり、「はっきり」を教える際には、コロケーションとして「する」をよく使用すること、「はっきりな」「はっきりだ」という形は使用しないことを導入することで、このような誤用を減らすことができると考える。

5.　まとめと今後の課題

以上のように、現在の日本語学習者のオノマトペの使用実態を明らかにし、さらに、伊藤他（2022）で選定した「日常語彙オノマトペ 100」に基づき誤用も見た。その結果、学習者のレベルが上がるごとに使用回数も増えることがわかった。さらに、初級学習者の誤用の特徴としては、出来事と関係するオノマトペの使用に関して、その出来事に基づく使用ができていないことや、コロケーションを覚えておらず、使用しない形を使ってしまうことが挙げられた。このことから、初級の段階からオノマトペの使用場面やコロケーションの指導を行うことで誤用を減らすべきであると考えられる。さらに、オノマトペを使用することで、それらが持つ生き生きとした表現力を使用しながら自身のことを 1 語で簡単に表現できるようになるため、この点からも初級からの導入が有効であると言える。

しかし、本研究の限界もあった。今回の調査は I-JAS の対話データを用いたものであり、インタビュー項目によって、出やすいオノマトペと出にくいオノマトペがあった可能

性がある。ロールプレイやストーリーテリングと比較すると、オノマトペの偏りは少ないと予想されるが、インタビュー項目はあらかじめ設定されていたため、学習者が普段から使用しているオノマトペであっても、今回のタスクでは使用されなかったものもあるだろう。

今後は「日常語彙オノマトペ 100」の語彙に絞って、理解語彙と使用語彙の調査を行い、指導方法の提案のための足掛かりにしたい。また、中級学習者、上級学習者の誤用の特徴も調査し、実際に学習者に導入する際の注意点をさらに明らかにしていきたい。

（左雲萌夏さくももえか・チェンマイ大学）

参考文献

秋元美晴（2007）「日本語教育におけるオノマトペの位置づけ」『日本語学』26(7)，24-34.

伊藤萌夏・北野朋子・森岡千廣・蔵本成美（2022）「日本語学習者のための日常会話におけるオノマトペの語彙選定」『日本語教育方法研究会誌』29(1)，82-83.

小野正弘（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館

川口義一（2016）『もう教科書は怖くない!! 日本語教師のための初級文法・文型 完全「文脈化」・「個人化」アイデアブック 第 1 巻』ココ出版

窪薗晴夫（2017）『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』岩波書店

国立国語研究所（1984）『日本語教育のための基本語彙調査(国立国語研究所報告 78)』秀英出版

迫田久美子（2020）「I-JAS 誕生の経緯」，迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬（編）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門：研究・教育にどう使うか』くろしお出版，2-13.

獅々見真由香（2016）「日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙選定―『BTS による多言語話し言葉コーパス』と『BTSJ による日本語話し言葉コーパス』を用いて―」『日本語教育』165，73-88.

蘇匯文（2021）「オノマトペの再認識と日本語教育への導入のあり方―日中対照研究に基づいて―」『創価大学大学院紀要』42，379-401.

張晶鑫（2018）「「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」にみる中国語母語話者のオノマトペ使用特性 ： 日本語母語話者及び韓国語・英語母語話者との比較から」『Learner Corpus Studies in Asia and the World』3，221-240.

灰島かり（2005）『絵本翻訳教室へようこそ』研究社

三上京子（2007）「日本語教育のための基本オノマトペの選定とその教材化」『ICU 日本語教育研究』3，49-63.

ローレンス・スコウラップ（1993）「日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの分布について」，筧寿雄・田守育啓（編）『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』勁草書房，77-100.